

集

俳句フォーラム

2022年1月 第82号



草団子

仁上博恵

梅雨空やこぼれる一句草団子
ハチャメチャに躍動六月の天作会
コロナ禍も何するものぞ緋のキャン
つづれさせ講座この頃オンライン
積乱雲五臓六腑を持ちたるか

瀬戸美文

感謝

近づけば応えて跳びぬあめんぼう
ほの暗く木の根取り巻く蟬の穴
夏座敷足裏嬉しく懐かしく
炎天を行きて復りし思い込み
昭和遠しそれぞれの八月十五日

大山夏子

蟬の穴

ほととぎす

石川東児

夏帽子出せば雨降る昨日今日
ほととぎす此処に来て鳴け疫盛る
八月十五日海に叫びし十七歳
土用灸熱きものとは知りつつも
冷や酒や今日一日の小さき

語り部

日置游魚

玉葱のつるりと剥けて安息日
みな枯れる想い百句書き遺す
語り部として何語れるか敗戦忌
夏至の没り日長々と見て終わる
言葉尻捉う貧しさ月に暈



彼岸

江口九星

秋彼岸戦するなど父遺言
無造作に虹を作りし水遊び
軒先に蟬の軀の黙かな
夏物を纏めし風呂敷母想う
天を指す赤カンナ朱を増して

あそび

若泉真樹

風葬のごと揚羽蝶草の上
遠くなる昭和敗戦日を胸に
秋の虻虚空の大河渉るかな
天の川心遊びはなりゆきで
名月や猫が思案の手を伸ばす

風立ちぬ

渡辺節子

青柿のひとつ地に落ち風立ちぬ
曼珠沙華大樹の陰で見栄を切る
割り箸の足ぎこちなく茄子の馬
荒海も越えて生きよと巢立鳥
暴れ梅雨朝市を張る媪あり

榎植の実

大山夏子

古本の街も遠退く炎暑かな
はつなつの風に押されて坂の町
榎植の実都電の駅にまだ青し
賜りし杯に溢るる菊の酒
押入に古い地球儀震災忌

夢心地

中川のぼる

打水の風情懐かし裏通り
盆東風や諸行無常の波しぶき
放屁虫戸惑う世相洒落にして
まほろばや秋澄む里の木々の色
虫鳴くや夢心地でのエピローグ

休耕地

伊藤昌枝

尾鱸立て鮎焼きあがる化粧塩
牧場より仰ぐ新涼八ヶ岳
緩やかに生きるが大地猫じゃらし
休耕地真っ赤犬蓼は蔓延る
稲光雨と急襲したたかに

秋あかね

吉宇田麻衣

風向きに逆行するや秋あかね
つくつくし今日寂しげに鳴きにけり
家事終わり今日はどうかと月を見る
熱き日々なぜか悲しい五輪かな
秋の風もうそろそろにへアカット

餓鬼忌

楠本和弘

若竹や風の極楽盗みたり
夕心発句に耽る餓鬼忌かな
萩の花雨の雫が連打する
星空や地には瀬音と花野ある
古地図の牧彷徨いて虫集く

天地の呼気

渡部恭子

白桃は故郷の香や物語
亀の子の手足のリズムラテン風
星祭在りし日の父母しなやかに
言い訳を引きずっている梅雨湿り
澄む朝天地の呼気を太極拳

地鎮祭

小澤えみ子

遠き日の麦茶絶やさぬ大薬缶
柿若葉雨降る予感ざわめきて
白扇の風にうるおう燐席
神主の声さやけしや地鎮祭
熱つ熱一つの秋刀魚ほおぼる余生かな

爆睡

酒井たかお

熱帯夜幻影の旅彷徨いて
風紋の月の砂丘に野宿せり
カナカナの森を揺るがす魔女の声
花木槿葉草と聞き手に取りて
一万歩歩きて爆睡敬老日

海ほおずき

由良則子

初恋も海ほおずきも遙かなる
浜木綿へ寄する思いの浪の音
濡れそぼつ地蔵の頭巾秋長雨
衣被母と似て来し仕草かな
カボス来る早一年が経ったかと

秋の音色

高畑太朗

冷奴薬味三皿をそろえけり
夏空を回す風力発電機
秋蝶や小牧長久手さまよえり
天の川死もて導く地動説
秋天や声をなくした団地群





夢のあと

平野無石

終の地は我家と決めてところてん
手綱いくつ少女鶉匠の指の先
藤村の旅情歌佐久の洗鯉
秋扇コロナ五輪の夢のあと
霧月夜読めぬ余命を測りおり

吾亦紅

都築繁子

鉄瓶の湯がたぎりおり半夏生
雲晩夏観客なしの甲子園
今朝の秋大き卓の一人膳
さわやかや近くに出来し常盤部屋
吾亦紅バッグを肩に木の歩道

双子のパンダ

篠田純子

さり気なく銀座の燕の巢を覗く
駄々こねて酔っ払いめく稍薄暑
双子のパンダ生れ息災や梅雨晴間
据えたての茅の輪くぐるや香の青々
台風のいくつも湧きて五輪果つ

菊の酒

田中藤穂

菊の酒指やわらかき巫女より受く
降り続く小雨三日や草の伸び
入院の句友を案じつつ九月
異変なり九月二日のこの寒さ
駅へ行く人も少なしコロナの秋

秋へ

大山夏子

木が欲しいみんなみんビルの壁で鳴く
遠花火かすかな音の方へ向く
菊の酒遺影にこぼす愚痴ひとつ
足止めの小雨三日や五輪果つ
入院の知らせ二人目となり秋へ